

下道基行「シリーズ『torii』より」
(2006～12年)



加藤竜「環境ウォーズ」(2014年)

写真の下道(岡山)

郷土ゆかりの若手作家を育成支援する「I氏賞」の受賞作家展が岡山県立美術館(岡山市北区天神町)で開かれている。第5回大賞の加藤竜(36)は新見市出身、ベルリン在住。は躍動する油彩画、第6回大賞の下道基行(36)は岡山市出身、愛知県在住。は静かな写真と、対照的な2人の表現は、多様な価値観が交錯する現代社会を映す鏡のようだ。

チェーンソーで木を切り倒そうとする怪物に追われるシマウマなどの野生動物。業火のような鮮烈な赤が全体を包み込む。繊細な描写と荒々しい筆触、写真と抽象がコラーージュのように入り交じる画面は強いメッセージを放つ。

「環境ウォーズ」をはじめ、環境問題をテーマとする油彩画14点を寄せた加藤は「環境破壊のニュースに接した時の怒りや悲しみ。わき起こる感情を描かずにいられない」と制作の原動力を語る。

油彩画の加藤(新見)

岡山県立美術館「I氏賞」の受賞作家展

一方「いつも何かに興味を持って旅している。けつまずいたものを拾い上げると面白い」という下道は、I氏賞の賞金を元手に出版した写真集3冊の紹介だ。

台湾やサイパンで日本統治時代に造られた鳥居を探し歩いた「torii」、側溝に架かる板など写して全長60頁にまとめた「bridge」、日本の夕暮れと同時に地球の反対側の夜明けを連続写真で捉えた「Dusk/Dawn」。

。淡々と積み重ねた記録から浮かび上がるのは、国家、人間、自然などの中に生まれては消える境界の存在だ。

高校時代は岡山市内の同じ絵画教室に通った2人。当時から、描くことにのめり込む加藤に対し、下道は対象をじっくり観察するデッサンが好きだったという。それから20年近く。それぞれの歩みから生まれた作品は、世界の見方を広げてくれる。

同展は12月13日まで(11月30日、12月7日休館)。奈義町現代美術館(岡山県奈義町豊沢)でも13日まで下道の個展が開かれている。

(松山定道)